

説 林

高麗樂についての一二の臆説

津田 左右吉

今も我が國に遺存してゐる所謂雅樂のうちに高麗樂（狛樂）といふものがあつて、高麗（高勾麗）から傳來した樂だといはれてゐる。高麗樂は果して高麗の樂が其のまゝに今に傳はつて居るのであらうか。もしさうで無いとすれば、それが何處で如何なる變化をうけたものであらうか。一體、高勾麗の樂はどんなものであつたらうか。これらは未だ十分解釋せられてゐない音樂史上の問題である。

中古以來、所謂雅樂中の外國樂は左右二部、即ち唐樂と高麗樂との二種に區別せられてゐて、舞樂には

必ず此の二部の樂が相對して一曲づゝ交互に演奏せられる慣例である。唐樂と高麗樂との特質を簡單に説明することは一寸むづかしいが、外形上、明にわかるのは樂器の相違であつて、唐樂が横笛、笙、箏、竽、一鼓（又は羯鼓）を用ゐるに反し、高麗樂では横笛の代りに高麗笛（狛笛）、一鼓（又は羯鼓）の代りに三鼓を用ゐ、又た笙を用ゐない。横笛と高麗笛とは何れも、横吹の笛ながら、高麗笛の音律は唐樂の横笛より二律（歐洲樂の語でいへば一音）づゝ高く、從つて音程が違つてゐる。之が爲に高麗樂では笙を用ゐることが出来ない。又た之が爲めに音名を唐樂の同じ名よりは二律高いところにあてゝゐる。即ち唐樂の平調を狛一越といひ、下無を狛平調といひ、

黄鐘を狛双調といつてゐる。(一越とか平調とかいふ語は本來調子の名であるけれども、我國ではそれを音名として用ゐてゐる。しかし、高麗樂で十二律一々の音名をかういふ風に呼ぶのでは無く、たゞ樂曲に用ゐられてゐる調子の主調音のみに特別にこんな名がついてゐるのである。高麗樂には此の三調子しか無い。)さて樂器の上にかういふ差違はあるけれども演奏の上では左右の二部は相對の資格を有つてゐる。

けれども高麗樂が前に述べたやうな樂器を用ゐ、又た唐樂に對して同等の位置を占めたのは平安朝の中頃以後のことであつて、其の前は、全くこれと趣を異にしたものであつた。それは類聚三代格に見える大同四年の太政官符に雅樂寮樂師の員數が定められてあるが、其の中に「唐樂師十二人、横笛師、合笙師、簫師、篳篥師、尺八師、篳篥師、箏師、琵琶師、方磬師、鼓師、歌師、舞師」、高麗樂師四人、横

笛師、篳篥師、真目師、舞師」とあり(後、齊衡二年の官符で高麗鼓師一員が増置せられた)、又た嘉祥元年の官符で定められた樂生の員數が唐樂は三十六人であるのに、高麗樂は十八人であるのもわかる。この樂師の數は大寶令の規定と同一で樂生は令に唐樂六十人、高麗樂二十人とあるのを減少したのである。此の外に、令には百濟樂師四人、樂生二十人、新羅樂師四人、樂生二十人とあつて、大同四年の官符にも「百濟樂師四人、横笛師、篳篥師、真目師、舞師」、「新羅樂師四人、琴師舞師」とあるが、樂生は嘉祥元年の官符によつて、百濟樂は七人、新羅樂は四人に減ぜられてゐる。(天平三年に雅樂寮樂生の員數を唐樂は三十九人、百濟樂は二十六人、新羅樂は四人、高麗樂は八人と定められたやうに續日本紀には記してあるが、大寶令の定員と嘉祥元年の官符に見える舊定員とが符合してゐるから、この記事は容易に信用し難い。百濟樂が高麗樂の三倍以上である

のも、又た其の次に度羅樂六十二人とあるのも甚だ疑はしい。此の數字には誤があるに違ない。これで見ると大寶令以後、平安朝の初期までは、高麗樂は唐樂に比べては遙に小規模なものであつて、大體、百濟樂や新羅樂と同じほどのものであつたことがわかる。尤も續紀を見ると「幸弓削寺、禮佛、奏唐高麗樂於庭：百濟王敬福等亦奏本國舞」(天平神護元年十月)、「幸弓削寺禮佛、奏唐高麗樂及黑山企師部舞」(同年閏十月)、「御大極殿：奏唐高麗樂及内教坊踏歌」(神護景雲元年十月)などゝあつて、高麗樂は唐樂と並稱せられてゐるが、百濟、新羅の樂にはさういふ例の無かつたこと、又た嘉祥元年の定員改正の際にも百濟樂、新羅樂が甚しく減少せられたに拘はらず、高麗樂が殆ど舊のまゝであつたこと、並に其の後、百濟樂、新羅樂が何時のまにか消滅してしまつたのに、高麗樂のみは(其の實質は如何に變つたにせよ)大に發展して唐樂と肩を並べるやうになつ

たことを考へると、高麗樂は百濟、新羅樂に比べて初から一段重んぜられてゐたらしきは思はれる。けれども樂器の貧弱な點からいつても、樂人の少いことから見ても、到底大規模の唐樂とは比べものになるもので無かつたことは明である。

ところで、其の樂器である。大同四年の官符に見える樂器の名は平安朝初期以前の高麗樂と後世の高麗樂との相違を示す大切なものであるが不幸にして其の名稱によつて實質の何たるかを明に知ることが出来ぬ。横笛が所謂高麗笛であるか否かすらわからぬ。我國に行はれた横笛には後に其の名を占有してしまつた唐樂の横笛と高麗笛との外、横笛より二律つゝ低い神樂笛があり、又た後世には遺つてゐないが、昔、東遊に用ゐた中管といふ横笛より一律高いものがあつた。が、それらが、ふるくから、かういふ風に各部の樂專用のものであつたか、どうか、明でない。又た百濟樂にも横笛があるが、それが百濟樂衰

滅の後どうなつたかも知れぬ。だから所謂高麗笛が昔から高麗樂専用の横笛であつたとは斷言がしにくい。次に箏篋が箏篋と違ふことは延喜式にも、此の二つを列記してあるので疑はないが、其の實質は明でない。たゞ箏篋、箏篋の名がいかにも類似して居つて全く無關係の稱呼ではないらしいから、栗原信光や、狩谷接齋が承平樂器目錄に箏篋一張、箏篋四面とあるのによつて箏篋は支那でいふ堅箏篋、箏篋は臥箏篋だらうといつたのが當を得てゐるのではなからうか（律呂集義、和名抄註）。堅箏篋は西域傳來のハアプ型のもので、堅箏篋は支那で作られた琴の一種である。箏篋にクダラゴトの名があり、續紀寶龜八年に百濟箏篋師の稱が見え、又た太同の官符の百濟樂に箏篋師とありながら、嘉祥の官符に箏篋生とあるのを見ると、箏篋、箏篋の區別が甚だ曖昧になるが、法令に文字を異にして記されてゐる以上別のものと思へばなるまい。クダラゴトは實は箏篋

であつて、大同の官符に見える箏篋は誤寫ではあるまいか。また莫目は續紀には莫牟とも書いてあつて、百濟樂にも用られてゐる。これは延喜式の絃樂器を列記した條に見えないから和名抄に吹物（管樂器）と一所に列べてゐるのは間違が無からう。支那の樂書に於いて曾て目にふれぬ名であるから、多分韓地特有のもので、其の名も韓語であらうか。唐書樂志に見える高麗樂、百濟樂共通の樂器に桃皮箏篋があるが或はそれかも知れぬ。こんな風に樂器の實質は今から明に推察することが出来ぬけれども、兎に角、絃樂器一個管樂器二個といふ貧弱なものである。それが、管絃種々の樂器を配合した唐樂にくらべて甚しき差異のあることはいふまでもなからう。（當時の唐樂に用ゐた樂器の種類が後世のよりも、ずつと多かつたことは前に掲げた大同四年の官符で明である）。

さて古い高麗樂の樂器が後世と違つてゐることは

この通りであるが、しかし樂器の差異は必しも樂曲の相違を示すとは限らぬ。特に古い高麗樂の横笛がもし後の高麗笛であつたならば、箏篳が後に加はつたことや、箏篳が廢れたことなどは樂曲其の者に何等の影響を與へなかつたかも知れぬ。箏篳は奏法の頗る自由なもので、大抵な音は出すことが出來、神樂にも東遊にも適用せられたくらゐであるから、高麗樂につかはれるやうになつたのに不思議は無い。

また、打ちものが後の高麗樂では大切なものになつてゐるが、鼓師は齊衡に始めて置かれたけれども、官符に「有高麗鼓生四人、習業之日無有其師」とあるから、鼓を用ゐたことはそれよりも前からのことであらう。西大寺資財帳に高麗樂の樂器として、箏篳、横笛、大鼓、小鼓、百子、銅鈸子、箏篳、莫目の名が出てゐる位だから、奈良朝時代でも打ち物を用ゐてゐたらしい。して見れば、これも樂曲の上に大した變化を及ぼさなかつたであらう。(資財帳の樂器を大

同の官符に見えるものと比べると箏篳と打ちものが多いだけである)。けれども、肝心な横笛が果して所謂高麗笛であつたか、どうか問題である。

後世に傳はつて居る三種の横笛が皆な二律づゝ違つてをり、中管が唐樂の横笛と一律の差があるといふのは偶然のことであらうか。唐樂の横笛は吹穴の外、七孔、神樂笛と高麗笛とは何れも六孔で、其の間に差異があるやうだが、横笛の「次」といふ孔は懷竹抄には「次穴非別條、名爲無調、是諸音鹽梅故也」とあり、樂家錄には、我國で附け加へたものであつて、支那傳來で無いとさへいつてあるから、これは特別のものとして考へてよからう。尤も正倉院御物中の横笛は七孔だといふから(友人東儀鐵笛氏の實見談による)支那傳來で無いといふ説はうけとり難いが、他の六孔の音律が神樂笛及び、高麗笛と二律の差があるといふ事實は、どこまでも動かすべからざることである。一體我が國へ傳來した唐樂の横笛

が支那で何といはれてゐたものであるか、よくわからぬが、限りある孔によつてあらゆる音を出すことは出来ないから、樂曲の旋律と調子によつてそれ／＼異つた笛（即ち或る旋律、或る調子にあてはまる音の出るやうに孔をあけたもの）を用ゐたに違ひない。我が國へ傳へられた樂曲は所謂呂旋、律旋を合せて六調子しかなかつたとしても、横笛がたゞ一種のみであつたとは思はれぬ。もし果して數種傳はつてゐたものとすればそれはどうなつたであらうか。

後世まで唐樂の横笛の外、少くとも三種の横笛、しかも其の音が都合よく二律もしくは一律の差を有つてゐるものが傳はつてゐたとすればそれが支那傳來の唐樂の横笛と何かの關係がなくはないのではあるまいか。別々の國に起つて、全く關係がなく發達した音樂の樂器が、かう都合よくできるものには無いからである。僕は神樂笛が決して我が國特有の樂器ではなく、支那傳來のものであると思ふが

（このことは別に論がある）、所謂高麗笛にも同様の論法を適用せられないであらうか。後世は唐樂の横笛でも、高麗笛でも決してそれ／＼の孔の自然の音ばかりで無く、種々なる技巧によつて、多くの音を出すやうになつたが、これは樂器の不足から強いて考へ出したことであつて其の笛本來のはたらきては無かつたらう。さうして、かういふ無理な技巧が必要になつたのは、何かの事情で一種の笛が唐樂なり、高麗樂なりそれ／＼の樂に專屬するやうになつたからではあるまいか。但し、高麗笛がもし果して支那傳來であるとしてもそれが高麗樂に適用せられたのは必しも、我が平安朝に始まつたとはいはれない。其の事情を研究するには高麗樂の我が國に傳來した時、どんな笛を用ゐてゐたかを考へねばならぬ。さうして、それには高麗樂がどこから、どうして傳來したかを知らねばならぬ。

高麗樂が高麗から直接に傳來したといふのは普

通のことであるが、一寸ひねつて考へると、それが支那を経て傳はつたと思はれぬでもない。我が國の高麗樂には吉簡のやうな西域樂、又た胡德樂とか歸德侯とかいふ支那風の名のついた曲があるが、それらを支那で高麗樂に混入したものと見るのである。

支那人が高勾麗の樂を知つたのは南北朝時代からのことと北周の王褒が既に高麗曲といふ詩を作つてゐる。隋代には開皇時代に置かれた七部樂中に高麗伎があり、唐代にも燕樂九部の中に高麗伎が置かれてある。だから、唐樂と共に高麗樂を支那から傳へたことがないとはいはれぬ。もし果してさうならば、高麗樂に唐樂の横笛を用ゐたことは既に支那に始まつてゐたかとも思はれる。といふのは、隋唐の所謂高麗樂は必ずしも高勾麗本國の樂其のまゝではなく、支那に於いて多少潤飾したものらしいからである。

隋書樂志に「高麗歌曲、有芝栖、舞曲有歌芝栖、樂器有彈箏、臥箏篳、豎箏篳、琵琶、五絃、笛、笙、簫、小箏

篳、桃皮箏篳、腰鼓、齊鼓、擔鼓、貝等十四種、一部工十八人」とあり、舊唐書樂志の高麗樂器には此の五絃が無い代り、大箏篳、搗箏があり、又た笛が義箏笛となつてゐるし、新唐書には、其の外に鳳首篳篥、龜頭鼓、鐵板があるけれども、横笛の名は何れにも見えぬ。が、たゞ通典には義箏笛の外に横笛が記されてある。此の横笛がどんなものかは明にわからぬが、前に舉げた樂器は多く龜茲樂系統のもので隋唐に行はれた西域諸國の樂には大抵同じ様なものがあるから、それが盡く高勾麗の本國に於いて具はつてゐたとは考へられぬ。特に隋書の高麗傳には「樂有五絃、琴、箏、箏篳、横吹、簫、鼓之屬、吹簫以和曲」とあつて、樂志に出てゐる高麗伎の樂器とは同じで無いところを見ると、いよゝ／＼さう思はれる。既に龜茲樂系統の樂器で潤飾したならば、横笛も同じ系統に屬する燕樂（即ち我が國に傳はつた唐樂）の横笛かも知れないのである。（唐書の高麗伎

を説いてゐる條に「琵琶以蛇皮爲槽、厚寸餘、有鱗、楸木爲面、象牙爲桿撥、書國王形」とあるが蛇皮を張るのも象牙を用ゐるのも南方の樂器らしい。文獻通考に「蛇皮琵琶、扶南、高麗、龜茲、疏勒、西涼等國、其樂皆有蛇皮琵琶、以蛇皮爲槽、厚一寸餘、鱗介具焉、亦以楸木爲面、其桿撥以象牙爲之、圖其國王騎象」とあるのは、之と同じものと見えるが、此の記事によると蛇皮琵琶は扶南あたりのもので、それが支那に傳はつてから、支那人が高麗樂にも西域諸國の樂にも適用したもので、高勾麗の本國の樂器では無いに違ひない。又た唐書の同じ條に「胡旋舞、舞者立球上、旋轉如風」とあるが、通典の康國樂の條に「舞急轉如風、俗謂之胡旋」とあるから、もし唐の高麗伎が果してこんなことをしたならば、それは西域の散樂から轉じて高麗伎のうちに混入したのであつて、高勾麗本國の舞ではなからう。これら皆な唐の高麗伎が純粹の高勾麗樂で無い證據であ

説
林

る。けれども、高麗樂が支那から我が國へ傳はつたといふ假想は隋唐の高麗伎の樂器と前に掲げた我が國のそれとの間に甚しき差異があるのと、天平三年の雅樂寮樂生の員數を定めた時「大唐樂生、不言夏蕃、取堪教習者、百濟高麗新羅等樂生、並取當蕃堪學者」とあつて、高麗樂々生を唐樂とは違つて高勾麗人から採つたのとて破れるであらう。高勾麗滅亡の前後に我が國へ其の國人の歸化したものが多いから高麗樂もそれらの人々の手によつて傳へられたと見るのが穩當である。前に引用した如く隋書によると高勾麗に種々の樂器があるのに我が國に傳はつた樂器が極めて僅少であるのを見て、所謂高麗樂は立派に樂人の團體が其の國樂を傳へたのではなく、歸化人中の樂の心得のあるものが不完全なる演奏をしたのから始まつたものであるらしい。さすれば高麗樂が支那から傳來したといふ假想を本として高麗笛が始から唐樂と同じ系統の横笛であつたと考へる

ことは出来なくなる。

しかし、もう一步進んで考へると、高勾麗の本國に於いて既に龜茲樂系統の樂器が入つてゐたので高麗樂が本國から直接に我が國へ傳はつたにしても其の初から唐樂と同系統の横笛があつたので無いかと思はれぬでもない。現に隋書高麗傳に見える樂器でも箏樂の如きは陳氏樂書に「箏樂一名悲樂、一名笳管、羌胡龜茲之樂也」とあつて、龜茲樂系統のものである。五絃、琴、箏の如き支那から入つたことの明な樂器があるのであるから、此等と共に支那を経て龜茲樂の或る樂器が高勾麗に傳はつたと考へるのは決して無理ではない。高勾麗は拓跋魏や、其の後を承けた北齊とは親密の關係があり、さうして魏齊には既に西域樂が傳はつてゐたことは隋書に「太武帝平河西、得沮渠蒙遜之伎、此樂所興、蓋符堅之末、呂光出乎西域、得胡戎之樂」とあり、齊の樂を述べてゐるところに「雜樂有西涼、鼙舞、清樂、龜茲等」

とあり、通典に「龜茲樂者起自呂光破龜茲因得其聲、呂氏亡、其樂分散、後魏平中原獲之、有唐婆羅門、受龜茲琵琶於商人、代傳其業、至於孫妙達、尤爲北齊文宣所重、常自擊胡鼓和之」とあるのでもわかるからである。佛教や佛教藝術が北朝から高勾麗に傳はつたと同じ關係が音樂の上にもあつたのであらう。けれども、かういふ大體論から直に所謂高麗笛が高勾麗の本國に行はれてゐたと推斷するのは大早計である。といふのは前に掲げた隋書高麗傳の横吹、樂志の笛は唐書の義觔笛に當るものと思はれるからである。義觔笛は文獻通考にも「如横笛而加觔、西梁樂也、而今高麗亦有用焉」とあつて高麗樂には必要のものと見える。さうして隋書にも唐書にも此の外に横笛が無く、通典にのみ別に横笛の名が出てゐるのを見ると、高勾麗の本國では横吹のものは義觔笛のみで、通典にいふ横笛は唐の高麗伎に於いて特に加へたものと考へられる。さすれば高麗樂が本國

から直接に我が國に傳はつたもので、其の中に横吹の管樂器があつたとしても、それは後の高麗笛のやうなものではなくて。此の義臂笛であつたと推察するのが妥當ではあるまいか。

かういふ風に、初めて我が國に傳來した高麗樂では後の所謂高麗笛を用ゐてゐなかつたと考へると、大同四年の官符に見える高麗樂の横笛もやはり高麗笛では無くて昔のまゝの義臂笛では無かつたらうか。百濟樂、新羅樂が依然として存續し、唐樂にも仁明天皇頃の新運動がまだ始まらず、林邑樂もまた後世の如く唐樂の一部とはせられず、獨立して（主に寺院に於いて）行はれてゐた時代であるから、高麗樂も大體に於いて傳來當時の状態を維持してゐたものと見なければなるまい。然らば、何の時から、また何故に今の高麗笛を以つてそれに代へたかといふに、仁明天皇の頃から一方では唐樂が新に活氣を帯びて現はれ、時人の賞翫を博したと共に、一方では

左右近衛府などて奏樂をする習慣が開けて來たが、左右相對してゐのづから競争の姿となるに當つて、同じ唐樂では面白くないから、自然、唐樂に對抗するに足る他の樂を要求することになつた。然るに、百濟樂、新羅樂は單純なもので興味が無い爲に自然衰頹して、前に述べたやうに雅樂寮の樂生員數すら僅にかたを還すばかりに減少せられたほどであるから、此の要求に應ずるには足らぬ。また伎樂や林邑樂は主に法會の樂として寺院に行はれたものであるから、これもふさはしくない。従つて唐樂に對抗するを得べき見込のあるものは、高麗樂の外には無かつた。高麗樂も其の規模は百濟樂などゝ大差のないものではあるが、奈良朝時代から既に唐樂と並び奏せられ、又た嘉祥の雅樂寮定員改正にもあまり減少せられなかつたほどであるから、其の樂なり、舞なりに何か特殊の興味があつて世人に喜ばれたのであらう。けれども唐樂に比べてはすべてが貧弱である

から、いよ／＼唐樂に對抗する位置に据ゑるには、よほどの潤飾を加へねばならぬ。それが爲には種々の管絃樂器をも加へたのであらう。後世には高麗樂に笙を用ゐないけれど、教訓抄によると、興福寺の新宴には高麗笛に笙を付けることがあるといふから、何か古例がそこに遺つてゐたものと思はれる。後世高麗樂に笙を用ゐないのは高麗笛の音律が横笛より高く、又た音程が違ふため笙がそれに合はないからであるが、笙其のものが昔から今の通りの一種のみであつたか、どうか。今の笙に不協和音を吹くことのあまりに多いことから考へても、また、「也」「毛」の二管を用ゐないことを見ても、昔は樂曲の旋律と調子により、それ／＼管をさしかへて吹いたものが、後世、其の法が廢れて、管が固定したのであらうと想像せられる。もし、さうならば高麗笛にも笙を合はせることが出来なかつたとは限るまい。(文献通考に義管笙といふものがあつて、「十七簧、舊外設二管、

不定置、謂之義管、每變均易調、則更用之」と説明してあるが、今我が國に用ゐる笙は全體十七管の中、二管だけ用ゐないのであるから、これとは違ふ)。又た字津保物語、樓の上の卷に高麗笛に琴を合はせることがあり、源氏物語、紅葉賀の卷にも、保魯俱世利(高麗樂の曲名)を笛で吹いて箏に合はせたことが見える。これも單に消閑の興として高麗笛と絃樂器とを合奏したことがあるのみで無く、室内樂たる管絃御遊、又は庭上の舞樂に於いて高麗樂に絃樂器を用ゐる慣例があつたからのことではあるまいか。催馬樂の櫻人などが高麗樂の地久などの曲節をつけたものだといふ傳説のあるのも、矢張り、高麗樂を御遊に用ゐた習慣があつたからかと思へば思はれる。高麗樂に太鼓や鉦鼓の加はつたのも同様の事情であらう。扶桑略記に見える村上天皇康保三年の侍臣舞の記を見ると、樂曲は唐高麗二種であるが、樂器は箏、琵琶、笙(二人)、横笛(二人)、大箏、小箏、銅鈸子、

鞀鼓、拊鼓、拊子、大鼓、鉦鼓等で、特に高麗笛の名もなく、又た高麗樂特有の樂器が其の中にあるらしくも見えぬ。これは高麗笛も横笛の名のうちに含まれ、其の他の管絃樂器や打物は兩方共用であつたのでは無からうか（鞀鼓は唐樂に限ると思はれるが）。もし唐樂に種々の管絃樂器を用ゐながら高麗樂にのみそれを用ゐなかつたならば、延喜樂、歸德候、納蘇利などの高麗樂を奏する場合には急に寂寥を感じて興味索然となつたであらうから、さうは考へられぬ。此等の事情から推測して、唐樂と高麗樂とが左右相對するやうになつた頃には高麗樂も種々の管絃樂器を用ゐる大規模のものにせられたことと思はれる。さうして高麗樂に仁和樂、延喜樂、蝴蝶などの新作樂曲が現はれ、蘇志摩の改作せられたといふ延喜前後が丁度此の規模の整つた時ではあるまいか。後には唐樂も衰頹して樂器も廢れたものが多く、舞樂にも絃樂器を用ゐやうな風になつたので、高麗樂

説
林

もこれと同じ運命に逢ひ、又た御遊などの曲目もほゞ定まつて高麗樂はそれに用ゐられなくなり、遂に今日のやうなものになつたけれども、延喜前後の盛時、左右二部の樂が互に相競つた頃はそんなものではなかつたらう。しかし、古い高麗樂をこれまでにするには、外形ばかりでなく、其の内容にも、よほどの潤飾を施す必要があつたに違ない。所謂高麗笛の用ゐられたのも之が爲ではなかつたらうか。高麗樂の中には唐樂から移つたものもあるらしく、退宿德、進宿德の二曲は、もと黃鐘調の樂（即ち唐樂）であつたといふ説が體源抄に見え、吉簡が西域傳來の散樂であることが明であり、又た、崑崙八仙、貴德候、胡德樂なども唐樂らしい名稱であることを考へると、よしそれ等が古い高麗樂の旋律や調子に準して改作せられたにしても、唐樂の影響が尠からず高麗樂に及んだことだけは推測せられよう。舞の手なども唐樂のを摸して表裏左右を反對にしたやうな

ものがあるとのことである。所謂番舞として相對せしめるのであるから、自然さういふことにもなつたであらうが、大體に於いて高麗樂が唐樂化する形勢のあつたことは争はれまい。だから、古い高麗樂の笛が廢れて、唐樂系統の横笛の一種が高麗笛として適用せられたと考へるのも、さほど亂暴のことでは無からう。

もとより如何に變改を加へても全然新しいものにしてしまつたのでは無い。高麗笛がよし果して此の臆測の如く、もと唐樂の横笛の一種であつたにしても、それを高麗樂に適用したのは音律の上か、旋律の上か、何かに於いて古い高麗樂に都合のよいものであつた故であらうし、今でも高麗樂の曲節と拍子とは唐樂と異つた特色がある。これも東儀鐵笛君にさいたことであるが、高麗樂の舞の手には樂句と合はぬものがあるさうだ。これは舞が唐樂に摸して變改せられながら、樂が古い趣を失はずにゐるから

であらう。また樂曲の名稱を見ても、兎に角、唐樂系統で無い高勾麗固有のものと思はれるものが多い。けれども、全く古い高勾麗樂其のまゝの旋律なり節度なりが、其のまゝに傳はつてゐるかどうかは疑問であつて、横笛の適用は高麗樂の内容即ち其の旋律などにも、多少の變化を來したのではあるまいか。かう考へて來ると、更に一段を溯つて、高麗樂の音階や旋律の法を研究せねばならぬ。樂を知らぬ僕には、かゝる研究は到底出來ぬが、しかし例の一、二の臆測を試に加へて見よう。

所謂高麗笛は横笛と同じく七聲音階の旋律を吹くことになつてゐるが、高勾麗の樂が果してそれまでに進歩したものであつたかどうか。支那でも昔は宮商角徵羽の五聲音階であつた。變徵變宮の二を加へた七聲音階が何時から現はれたかは明で無いが韋昭(三國時代の人)の國語の註にも後漢書の律曆志にも其の名が見えるから漢代にはあつたであらう。け

れども、ずつと降つた隋代になつて鄭譯が北周に西域樂の七聲を傳へた龜茲人蘇祇婆の説を敷衍して論した時、二變の説に歴史的根據が無いといふので之を取したものがあつたから、七聲音階は理論上、正當なものとして一般には承認せられなかつたかと思はれる。尤も實際に事物があつても古傳になゐるのは、強いてそれを非難するのが支那人の癖であるから、學者が理窟の上で七聲を非認しても實際の音樂にそれが無かつたといはれぬが、名稱が五聲のみであつて、他の二聲は宮徵に一律低いところから、それに變の語を加へて呼んだのを見ると、樂律の論が起り五聲の名の出來た時代には實際、五聲音階であつたらうと思はれるから、七聲音階は早くとも漢代に至つて現はれたのであらう。我が國の謠ひものも今日に至るまで大體五聲音階だといふことである。して見ると、文化の低度のさまで高くなかつた高勾麗の樂に七聲音階が具はつてゐたとは思はれ

ぬ。もし支那から傳はつた樂器が七聲音階を具へて居るものであるか、又は樂器と共に樂曲も傳はつてその樂曲が七聲音階から成り立つたものならば、高勾麗に七聲音階の樂が學ばれたことはあらう。しかし、高勾麗人がそれを十分に消化して、すべての樂を七聲音階にするまでに進んだかは疑問である。さうして、前に述べたやうに横笛が高勾麗に行はれず、義猪笛のみがあつたものとすれば、其の義猪笛が果して七聲音階を吹かれるほどのものであつたか、どうか、大なる疑問といはねばならぬ。義猪笛は上に引用した如く文献通考に西梁樂とある。西梁は西涼のことかとも思はれるが、隋書、唐書、通典、文献通考等に載つてゐる西涼樂の樂器中には其の名が見えず、たゞ高麗伎にのみあるから、他に反證の無い限り、高勾麗固有の樂器と見るのが穩當であらう。従つてまた、今の高麗樂のやうな旋律の法が、高勾麗に存在してゐたか否かも疑問である。

更に考へると高勾麗の本國に西域もしくは支那の樂曲が輸入せられてゐたかどうか、甚だ覺束ないものゝなる。我が國に傳はつてゐる高麗樂の曲の名を見ると支那もしくは支那に傳はつた西域樂の名に似たものが無い。尤も前に述べた昆崙八仙とか、歸德候とか胡德樂とかが高勾麗に於いて支那から輸入せられたものだといへば、いはれないことも無からうが、もしさうとすれば、僅々此等二三曲のみか輸入せられたとは思はれぬ。又たもし多くの樂が傳はつて高勾麗の樂が支那化したのならば、其の他の多くの樂曲の名が一向支那めかしくないのが不思議である。だから、我が國の高麗樂に見える此等二三の支那めかしい樂曲は矢張り、我が國で加へられたものと見るのが穩當であらう。なほ參考のために隋唐の高麗樂曲を見ると隋書に芝栖といふ名があり、文献通考に「唐武后時尚餘二十五曲、貞元末唯能集一曲、衣服亦衰衰敗、失其本風、傀儡、并越調夷賓曲、李勣

破高麗所進也」とあつて、越調夷賓曲の名が見える。けれども、隋書のかきぶりを見ると、芝栖といふ曲は支那の樂では無いらしく、又た夷賓曲は同じ文献通考の別の條に「及遼東平、行軍大總管李勣作夷美賓之曲、以獻」とあるから、高勾麗の樂とは全く關係の無いものである。此等零碎の記事の外に高麗伎の内容を覗ふに足る材料が無いから明な判斷は出來かねるが高麗伎に支那の樂と同一のものがあるといふやうなことは、すべての樂書に見當らぬから、支那人は高麗伎を全然別種の夷樂と見做したものと推測せられる。舊唐書楊再思傳に「請剪紙、自帖於巾、却披紫袍、爲高麗舞、縈頭舒手、舉動合節、滿座嗤笑」とあるのも、高麗舞といへば一種特殊のものに見られてゐたといふ一證であらう。従つて高勾麗に支那の樂曲が入つてゐたとは考へられぬ。さすれば高勾麗の樂は樂器に支那から傳へたものがあるけれど、樂曲其のものは純然たる其の國特有のものであ

つたと思はれる。だから支那もしくは西域系統の七聲音階や旋律の法は、まだ高句麗に行はれてゐなかつたものと見ねばなるまい。

かう論じて來ると、我が國に傳はつた高麗樂は、どこかに特殊の興味はありながら、随分幼稚なものであつて、其の曲節も今傳はつてゐるやうなものではなかつたのではあるまいか。さうして平安朝に於いて唐樂系統の横笛をそれに適用すると共に多少の潤飾を施したのではあるまいか。これが僕の結論である。

最後に附言して置きたいことは高麗樂と百濟樂及び新羅樂との關係である。百濟樂、新羅樂の廢滅してしまつた今日、それを明瞭にすることは出来ないけれども、大體の推測はつかぬでも無い。新羅樂は大同四年の官符によると樂器は琴のみである。琴は所謂新羅琴で十二絃のものであるから、加羅（任那）の嘉悉王（新羅の眞興王、我が欽明天皇の時代より少

し前に當る）が于勒に命じて造らせたといふ傳説のある同じ十二絃の加耶琴であらう。琴、もしくは箏の類から轉したものに違ひないから西域樂の影響を蒙らない支那系統に屬するものである。（序にいふが、新羅に玄琴といふ六絃のものがある。倭琴と關係がありげでは無いが。同じ長さ、同じ太さの絃を槽の上に張つて、柱によつて調絃する琴の類は支那特有の樂器で、玄琴も、倭琴も、加耶琴も皆な同じ系統のものである。其の創製の時代はわからぬが、加耶琴についても嘉悉王云々の傳説には必しも信を措くことが出来ぬ）。三國史記樂志に「新羅樂三竹、三絃、拍板、大鼓、歌舞、舞二人、放角饅頭、紫大袖、公欄、紅鞋、鍍金鈴、腰帶、烏皮靴、三絃、一、玄琴、二、加耶琴、三、琵琶、三竹、一、大琴、二、中琴、三、小琴」とあるが、これは新羅一統の後、幾分か唐の俗樂などの影響をうけてからの組織で、我が國に傳來した新羅樂はそれよりも前、加耶琴を彈して舞つた

單純のものであつたらう。同じ書に于勒所製十二曲の名があるが、其の中に師子伎などいふのがあるのを見ると、これも、于勒時代のふるいものではあるまい。兎に角、我が國の新羅樂々器はたゞ所謂新羅琴のみて笛の類すらも無い。新羅琴は文德實錄に「新羅人沙良眞熊、善彈新羅琴、(興世)書主相隨傳習、遂得秘道」とも見えてゐるから、或る好事者には愛せられたかも知れぬが一般の興味をひくほどのものでは無かつたらう。さうして、こんな琴のみて笛もなく、また拍子をとる打ち物も無い樂の舞が如何に單純なものであつたかも知像せらる。高麗樂曲の蘇志摩は曾戸茂利て素盞鳴命の故事を象つたものだから、もとは新羅樂であつたらうといふやうな説もあるが、これは神話の素盞鳴尊が實在の人物でない以上、全く無意味のことであるのみならず、樂の上からいつても、新羅樂は後の右部の樂に攝取せられるほどの價值のあるものでは無かつたらう。次に

百濟樂の樂器には横笛、箏篳、莫目の三があるが、百濟の對外關係から推察して、横笛箏篳は支那の南朝方面から傳へたものと思はれる。箏篳は前にも述べた如く、支那流の臥箏篳らしいが横笛はどんなものか、さるてわからぬ。たゞ隋書の百濟傳に「有鼓角、箏篳(臥箏篳であらう。支那に箏篳の字は見あたらず。特に箏篳と書く場合は大抵臥箏篳らしい。)、箏、竿、篳、笛之樂」とあり、舊唐書樂志に見える百濟樂の樂器に箏、笛、桃皮箏、箏篳の名が見えるが、何れも西域樂の系統のもので無いから、横笛も支那のものであつたらう。樂器にはこんな支那輸入のものがあるが、樂は國風のものであつたらしく、國史に百濟人の風俗舞を奏すといふ記事が屢見するので其の有様が推察せられる。多分我國の諸縣舞榭節舞などいふものと大差のないものであつたらう。従つてこれも高麗樂とは全然系統を異にするものである。従つてまた、ある論者の如く、後の右舞に百濟樂か採り入れられたとは思はれぬ。樂器の名が似て

ゐるために高麗樂と百濟樂とを同一視してはならぬ。

以上は主として文献の上より見た臆説である。も
とより臆説にとゞまるので、敢て最初に提出した問
題の解決に一步を進めたと信ずるのでは無い。試に
卑見を述べて大方の教を仰くのみである。

狼牙脩國考（第二回）

藤 田 豊 八

五

此國の所在に關しては異説紛紛、學者各々の見
ところを異にす。ビール諸氏が西域記の迦摩浪迦及
び寄歸傳の郎迦戌を解して Pegu 及び Irawadi の De-
lia ならんとする説の探るに足らざるは前に已に之

を説きぬ。又たグリニー氏が隋書の狼牙須を解して
Koh Kahu ならんとする説の據るに足らざるも、亦た
已に之を述べぬ。特にヒルト氏が梁書の狼牙脩を以
て馬來半島の Tenasserim 若くは Kra 地方なるべし
となし（*Orno-jit-kwa*, p. 194）隋書の狼牙須に於て、
畧ぼグリニー氏の説に贊同の意を表せる、單に臆測
に過ぎずして毫も證明するところあらざるなり。

しかも此等は較々進歩したる説なり。テンチント
氏の如き、梁書及び通典の狼牙脩を以て Lanka 即
ち Ceylon となせる、梁書に狼牙脩の外に獅子國ある
を知らざるに坐す。（*Tennent, Ceylon*, vol. I, p. 584）
而してグレナグールド氏の如きすら、明人が隋書
の狼牙須を以て錫蘭とする誤謬を襲うて疑はす。焦
竑獻徵錄に云ふ、錫蘭古郎牙須と。何喬遠名山藏に
云ふ、錫蘭山國、古郎牙須、亦曰裸形國、不衣也。中界
城極西可望見焉と。茅瑞徵象胥錄に云ふ、錫蘭山中界
占城極西可望見焉、番語高山爲錫蘭、因名、或曰古